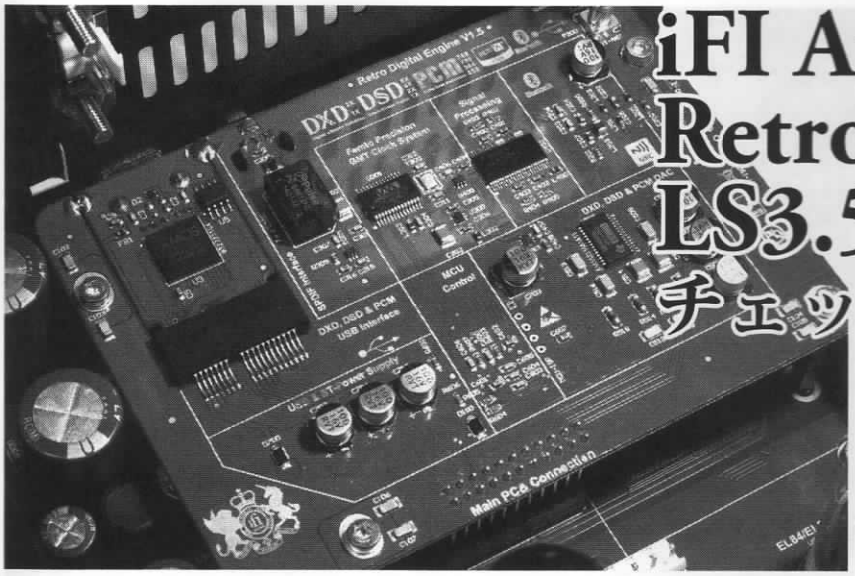

iFI Audioの Retro Stereo 50とLS3.5をチェックする

中川浩一
土岐啓太
編集部

ハイレゾのブランドが作った「全部入り」真空管アンプをそれぞれの視点からチェックし，機能と性能を検証した

iFIのStereo50のデジタル部について

中川浩一

iFI社のStereo50は，昨年秋に発表され，この8月から発売されていますが，好評に推移しているようです．

Stereo50は，USB DAC，モバイル機器とのワイヤレス機能も備えた真空管アンプと，スピーカシステムで構成されるオールインワンのオーディオシステムです．さらに，ほとんどのオーディオフォーマットの16bit/44kHzから32bit/768kHzに至るまでのPCM，Octa-DSD 512（22.6/24.6MHz）に至るまでのDSD，2xから768kHzまでのDXDに対応できます．

このシステムの特徴は，ミニコンポとは違い，各部が関連をもって綿密なオーディオ対応設計が行われていることでしょう．また，デジタル部は，同社のnano iDSDやmicro iDSDなどのDACと同じ設計コンセプトに基づくものです．

ここでは，編集部からの依頼によりStereo50のデジタル部の概略を紹介します．

この種の装置のデジタル部としては，DAコンバータ，USBにインターフェイスするUSBコントローラ，信号処理用DSPから構成されます．DAコンバータ用デバイスとしては，シーラスロジック（ウォルフソン），テキサスインスツルメンツ（バーブラウン），旭化成，ESSのDAコンバータチップが使われていますが，Stereo50にはバーブラウンのチップが使われています．

10年以上前に開発されたバーブラウンのDACチップPCM1738は，64レベルに変換するICOB部と5レベル3次ΔΣ変調器より構成されていました．そして，出力回路のAdvanced DAW部で，両者は加算され，デジタルからアナログに変換する電流セグメントでの最適動作タ

の例としStereo 50でも新たに開発した真空管回路とクラシックアンプの名器のDNAを受け継いでいるとしています.

最後に,筆者のStero50の試聴についての感想をのべておきます.他社のDAコンバータ・チップ(ウォルフソンのWM8741とバーブラウンのPCM1792)を使ったDACのアナログ出力をStereo50のアナログ入力端子に入力し,同じCDプレーヤのSPDIF出力をStereo50に入力した時の音質の違いを試聴してみました.結果は,明瞭度にはさほど違いは感じられませんでしたが,SPDIF入力の方が力強く,飛び出して来るような音を聴くことが出来ました.ただ,高音は鋭すぎて,違和感を感じる人がいるかもしれません.

また,PCからUSB端子をとおして,音楽データを転送するには,ソフトウェアのインストールが必要ですが,ダウンロード時にいろいろ条件が付けられていますので注意しなければなりません.

バーブラウン(TI)のDAコンバータチップは,最近特に注目されているものではありませんが,オーディオの知識と他のチップとの関連を十分考慮して設計すれば,かなりの特性が得られるという一つの証明でもあります.

【試聴ソース】

〔Art Pepper meets The Rhythm Section〕

〔チャイコフスキー・バイオリン協奏曲/神山真由子〕

比較DAC:自作WM8742,デジットキットPCM1792

【常用システム】

38cm+30cmウーファ,811ホーン・ミッドレンジによる3chマルチシステム

DACは優秀,可変PhonoEQはそれなり

土岐啓太

是枝氏が書いておられました.自作機器だけで聴いている人は非常に不自然な音が出ていても気が付かない,と.実にその通りだと思い,自覚もしております.大沢式カートリッジ,電流出力アンプ,抵抗制御和紙スピーカを使ったモノラルシステムでソースはほとんどがモノLP,という私にとっては,「金属的なきつさを取り除いたなめらかで自然」な本気の音はかなり距離感を感じるものでありました.以下そういう者による感想としてお許しいただければ幸いです.

竹製のスピーカは美しく魅力的で,アンプの筐体も統一感のある仕上げとなっています.真空管の発熱に対応して開口部は大きくとられていますが,デザイン上の処理は秀逸に思います.筐体後方から見える出力トランスのサイズから考えてA級25W+25Wのオペレーションは少々無理があって,当然発熱量自体は比較的多く,設置場所への配慮や球の寿命などに注意が必要ですが,初めて真空管アンプを使うユーザも想定されるため少々気になりました.

DAC部に関してBluetooth接続とUSB接続との比較では,USB時の方が若干音が近く聴こえるとともに背景の音場の広がりも感じられて好印象でした.

テスト中一点問題がありました.USBで聴いていてBluetoothに切り替えてファイルを再生し,再度USBに切り替えると再生速度が10%ほど早くなってしまいました.この現象はUSBケーブルを抜いて再

◆試聴の様子

度認識させないと治りませんでした．試聴機だけの問題の可能性もあり，当方の環境に依存した現象かもしれませんが，通常の使用で想定される操作ですので改善を望みます．

さて，石塚氏による紹介以来DACのテストで常用しているグッディーズのエネスコ・クロイツェルソナタですが，音揺れを感じることなく無難に再生しました．Bluetoothでも USBでも違いは感じられませんでした．単体のCDプレーヤ，USB接続のDAC等々テストを重ねていますが，このソースで不自然な音揺れが発生する機器はかなり多いのが現実ですので，DACは総じて非常に良い出来かと思います．

次にアナログイコライザの試聴です．カートリッジは常用の反発磁気回路にバリレラスタイラスユニットを組み合わせたモノラル機とDL-103を使用しました．いずれもMChigh端子への接続です．相当かけ離れたキャラクターのカートリッジですが，RIAA特性でない盤がほとんどモノラルであることから，以降は常用カートリッジでの試聴とします．

再生イコライザ特性に関しては，RIAA一本でOKとして特に意に介さない方も多いかと思いますが，正しいイコライザ特性で再生した際の「決まった」感じを知ってしまうと，以後無視することは難しくなります．録音特性が不明な盤に関していろいろと探って正しく聴こえる設定を探し当て，演奏から新しい魅力が聴こえた際などは非常に大きな喜びを感じます．

トーンコンノブによるイコライザ特性の調整はよいアイデアで操作性も良好，ターンオーバとロールオフを別々にコントロールできること自体も非常に重要な点です．各種特性の代表的な盤をかけてみましたが，好みで適当に高低音を上げ下げしてこんな感じか，というようなあいまいなフィーリングの域を出ず，マルチイコライザの醍醐味である上記「決まった」感じが希薄な点は残念でした．試しにヘッドフォン端子から常用のモノラルシステムに入力して聴いてみると，かなり改善されますので，イコライザ自体は有効に機能しているように思います．

総合的にはDACは優秀，イコライザもモノラルLPの楽しさを新しいユーザに知ってもらう可能性を秘めていますが，パワーアンプを中心に全体の音作りが今少し鋭敏になっておれば，これらの利点がさらにはっきりと感じられて「遊べる」システムになると感じました．逆に現状のままで使うとすれば，Bluetoothによるカジュアルな使い方がスマートで本機にマッチするように思いました．

【試聴CD】

〔Fiddler's Green/Tim O'Brien〕 Sugarhill/SUG-CD-4006
マッチしたソースの一つ．ケルトの香りが強いアコースティック．

〔ベートーヴェン　ヴァイオリン・ソナタ第9番イ長調作品47「クロイツェル」/エネスコ〕 グッディーズ/33CDR-3417
音が揺れるテストソース．

【試聴LP】

〔ベートーヴェン　ピアノソナタ月光/イェンナー〕 独ベルテルスマン/13179
NAB特性のテスト盤．盤鬼「名曲この一枚」

〔ベートーヴェン　ヴァイオリン・ソナタ第5番ヘ長調O作品24「春」/シゲティ〕 米コロンビア/ML4870
コロンビア特性のテスト盤．盤鬼「名曲この一枚」

〔ヘンデル　合奏協奏曲集 作品．6第5番ニ長調/第6番ト短調/ニール〕 英デッカ/LX3055
デッカ特性のテスト盤．盤鬼「名曲この一枚」

〔ジャンゴ/MJQ〕 米プレスティッジ/LP7057　AES特性のテスト盤

「らしさ」を強調したキャラクター

編集部

このシステムはハイレゾ音源をヘッドフォンで聴くのに慣れたユーザーに向けた，ひとつの提案のように思える．LS3.5から再生されるサウンドはヘッドフォンから聞こえるタイト＆スリリングなものとは異なり，ややナローでディープなものだ．AMラジオやかつての電蓄を思わせ，あえて「あの頃の音楽」を演出しているように感じられた．年配者には馴染み深く，若者には新鮮な体験ができ，サウンドデザインとしても面白い．また，本来なら単品で売られているnano iDSDとiPhonoに相当する回路が内蔵されていながらこの低価格というのも戦略的である．しかしながら，真空管アンプ部分はもう少し動作を軽くして，トランスや電源部の容量に余裕を持たせて欲しい．タマの挿し換えなど長く楽しめそうなアンプなのだから．